

### III. 結びにかえて・未来に向けて

今日、社会は劇的に変化しており、グローバルな社会を力強く生き抜き、誰も予測できない未来を切り拓いていくこれからの子どもたちには、単に知識や技能を習得させるだけでなく、集団の中で多様な考えや価値観に触れ、それらを受け入れ、柔軟に議論し、主体性や探究する力などをはぐくみ、社会性や規範意識を身に付けさせることが必要です。

そのためには、学習や遊びの中で子ども同士が互いに高め合うことができる「学校規模の確保」や「子どもたちと直接向かい合う教員の資質向上」を図ることが本市の責務であると考えています。

特に、近年児童生徒数の減少に伴い、学校の小規模化が進行する中、本市ではこれまでも複式学級が存在する小学校に対して、二つの学年を指導する担任をサポートする学習補助員の配置や、教科を指導する教員が不足する中学校に対して講師を配置したり、隣接する小・中学校の教員に兼務辞令を発令したりするなど、小規模校のデメリットを最小化する取組みを進めてまいりました。

しかしながら、全国的に少子化に歯止めがかからない状況下において、10年後、15年後も、今以上に小規模化していく本市の学校を現状のまま維持することが、他者と協働し、社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の担い手となるべき本市の子どもたちのためになるのか、私たちは、改めて考える必要があります。

一方で、再編対象校としている複式学級が存在する小学校や、全学年単学級の学校を含む小規模校にもよさがあることは認識しています。また、学校は地域に支えられ、校区というエリアにおいてコミュニティが醸成されてきた側面もあります。

文部科学省の「公立小学校・中学校の適正規模・適正配置等に関する手引」では、山間部、豪雪地帯においてスクールバス等を導入しても安全安心な通学ができない場合や、安定的に通学可能な範囲で適正規模化を進めることが難しい場合には、小規模校を存続させることが必要となる地域も想定されているところです。

また、富山市通学区域審議会やパブリック・コメントの意見の中には、少人数での学習を希望する子どもたちや保護者の意見も少なからず寄せられ、そうしたニーズへの対応を検討する必要があると考えています。

市教育委員会では、この度、将来の子どもたちの学びを保障するために、学校再編計画を策定しました。計画を進めるにあたり、地域ごとの学校規模の適正化を図ることに加えて、保護者やこれから保護者となる方、地域住民と協働しながら、全市的視野にも立った本市の教育の全体像を構築していく必要があると考えております。

今後、各地域に赴き、実際に保護者等の声を聞きながら、様々な角度から議論を重ね、さらなる本市の教育の深化・発展に努めてまいります。